

連載小説「女装強要妄想ノート」

5. 4月第1週「エイプリルフールの嘘に騙され、女装させられる」

「真弓、学校から書類が届いてるわよ」

朝食のあとで母親に渡された大きな封筒を受け取って、佐々木真弓は怪訝な顔をした。

宛名は「学校法人志路学園 附属女子小学校」。志路学園は真弓と亜弓が通っている私立校だが、真弓が通っているのは高等部。附属女子小学校から送られてくるとすれば、つい昨日まで在籍していた亜弓の方だろう。

しかし宛先は間違いなく、「佐々木真弓様」となっていて――

「なんで附属小学校が、オレ宛てに……？」

不安に襲われながらも封筒を開き、中身を確認する。その一番上にあるプリントを一読して、真弓の目が驚愕に見開かれた。

「こ、これ、マジ……！？」

「なにになに、どしたの？ って――」

横から覗き込んだ亜弓も目を丸くして、

「わーお、本学高等部在籍の右生徒――つまり兄ちゃんを、附属女子小学校に送る決定？ それも、1年生として？ つきましては同封書類を記入のうえ、入学式開始までに女子小学校の事務受付までご持参ください――」

「な、なんで！？ オレ別に、落第するようなことはしてないのに……！」

「ふふっ、よくわからないけど、学校からの連絡なら仕方ないわね」

高校生の息子が小学校――それも女子小学校に落第したというのに、母親はおっとりとして笑って、

「でもよかったわ。ちょうど亜弓ちゃんが卒業して、制服もランドセルも真弓が引き継いだところだったんだもの。ね？」

「う、うん……」

そう言われればその通りなのだが、じっさいに妹のおさがりの制服を着て、ランドセルを背負って学校に行くことになるなんて考えてもみなかった。

いや、例の「女装妄想ノート」には、

「落第して、附属女子小学校に通うことになる――」

そんな一文もあるのだが、実際に通えと言われると現実感がまるでない。

(オレ、本当に女子小学校に通うのか……?)

しかし困惑しているのは真弓一人で、母親と妹はどんどん話をすすめてゆく。

「さて、そうと決まったら、小学校に通うための準備をしないとね。まずは——これからはちゃんと、制服を着るようにしないと」

「そうねー。兄ちゃん、けっきょくあれから制服着てないし」

「うっ、それは……さすがにちょっと、恥ずかしくて……」

二人からチクリと言われて、真弓は目を逸らす。

真弓がいま着ているのは、水色の長袖Tシャツにインディゴのスキニーパンツ。シャツのプリントはレースの縁取りがついた女兒ブランドロゴに大きなりボンで、一見して女兒服とわかるものだったが、下はパンツである。どちらも妹から譲られたおさがりの中では、かなりユニセックスに近いものだった。

先週の「卒業」で、今後は家の中では妹のおさがりで過ごすように言われた真弓。しかし細かな指定まではされていなかったため、自分から可愛いスカートやワンピースを好んで着るのはさすがに恥ずかしく、シャツやパンツ類をメインにしてお茶を濁していたのだった。

赤いラインが特徴的な女子小学生の制服も、先々週以来、着ていない。しかし——

「ふふっ……でも、今年度から女子小学校に通うんだから、今日からはちゃんと制服を着て、慣れておかないとね」

「は、はい……」

ここまで言われて着ないわけにもいかず、真弓は朝食を食べ終わるとすぐに2階に上って、自室の壁に掛かる「制服」を見上げた。

高等部の男子制服の隣に並べられた、女子初等部の制服。

紺地に赤いラインと赤いスカーフが結ばれたセーラー上着に、プリーツスカートの一式だ。さらに赤いランドセル、黄色い通学帽子と名札といった小物までそろっている。つい先週まで妹が使っていた女子小学生セットで、

「はぁ……確かにあの時は、このまま女子小学校に通えそうだ、なんて話してたけど……まさか現実になるなんて……」

ぼやきながら、壁にかかったセーラー服を下ろす。

この制服を着て、ランドセルを背負って、女子小学校に通う。しかも1年生ということは、自分よりはるかに——でもないが、10センチ以上は背の低い少女たちの中で過ごさなくてはいけないのだ。

「そっか……オレ、小学1年生の女の子と一緒に、学校でお勉強したり、運動したり——お

友達になって、おうちに行ったり、公園で遊んだりすることに——」

具体的に想像すると改めて現実感が湧き上がってきて、真弓は羞恥と興奮に、尿道の内側を先走りに濡らすのだった。

まずはシャツとパンツを脱いで下着姿になる。

下はどうぜんのように、キャミソールとインゴムショーツ、つまりは女兒用下着のセットであった。今日はいわゆるゆめかわ系のデザインで、ピンク地にユニコーンが牽く馬車と、それに乗ったお姫様のイラストが描かれていた。

シャツやパンツはユニセックスっぽいデザインのものでごまかせても、下着ばかりはそうもいかない。なので下着だけは、先週から女兒用を穿いていた。

「下着には慣れてきた——けど、それもそれでちょっと怖いな……」

妹のおさがり女兒下着に、感覚が麻痺していく自分に不安を覚えつつ、真弓はセーラー服にとりかかった。

袖を通すのは2週間ぶりとはいえ、着方を忘れるほど難しくはない。前ファスナーを開いて羽織り、セーラー襟の裏のスナップボタンを留めてファスナーを閉じるだけだ。スカートもファスナーを左脇に回して穿く。

「でもやっぱり、恥ずかしい……っ！」

ここ数日着てきたカジュアルなものでさえ、可愛らしいデザインや色合い、何より「女兒服である」という意識が彼の心を辱め——同時にその股間で、少年の証を疼かせていたのである。

ましてセーラー服、ブリーツスカートともなれば、独特の肌触りと重みが常に全身を包む。スカーフを折ってセーラー襟の後ろに通し、胸元で本結びしたあと、襟を元通りにして後ろ側からもスカーフの一部が覗くようにする。

もっとも、ちゃんとできているかどうかは目視で確かめるよりほかになく——

「……やっぱり、鏡で見ないと、ダメだよね……」

恥ずかしさをこらえて、姿見の前に立つ。

襟の前で結んだスカーフは、おおむね形よく結ばれている。振り返って後ろ側を確認してみても、襟の裾から赤い三角形が覗いていた。

「うん、いい感じ。でも——」

改めて正面から鏡を見れば、そこに映っていたのは、妹によく似た女子小学生——およそ自分の姿とは思えない美少女であったが、

「はぁ、本当に、女の子みたいだけど……」

真弓はそっと、スカートをめくりあげる。

その下から現れたピンクのショーツに、隠しきれぬ雄の昂ぶりが起き始めているのを、彼は妖しく濡れた瞳で見つめるのだった。

「真弓ちゃん、支度はできた？」

「あっ、亜弓——ノックもなしに入ってくるなって……！」

とつぜんドアが開いて入ってきた妹の姿に、真弓は狼狽してスカートを下ろす。

しかしそれはいっしゅん遅かったようで、

「いいでしょ、あたしは真弓ちゃんのお姉ちゃんなんだから。それに、見られて困るようなことをしてた真弓ちゃんの方が問題なんじゃない？」

「う……な、何のこと……！？」

「とぼくれちゃってー。鏡の前でスカートめくってたくせに。どうせおちんちんがむずむずして、気になって見てたんでしょ？」

「ううっ……！」

「くすくすっ、わかりやすいんだから。でも今は、先に髪形を整えちゃいましょうね」

亜弓はそう言って、雑に後ろにまとめていた兄の髪をほどくと、軽くブラッシングして、前回のよう左右で二つ結びにしてしまう。おさげを飾るのは、赤いボールのついたヘアゴムで、

「どう？ 後ろで結んだだけよりも、こっちのほうがよっぽどかわいいでしょ？」

「う、うん、ありがとう……」

恥じらいながらもまんざらでもなさそうな「妹」の答えに、亜弓は嬉しそうに破顔して、
「どういたしまして。真弓ちゃんも今日から女子小学生なんだから、髪形とかも自分でオシャレしないとダメよ？」

「う、うん……」

「真弓ちゃんくらい長ければ、いろいろできるからね。サイドテールに、ポニーテール。ツインテールに、ツーサイドアップ。ハーフアップとか、三つ編みなんかもいいわね」

「お、オレが、そんな髪型に……」

「ちょっと、真弓ちゃん。もう女子小学生なんだから、『オレ』とか言わないの。あとは素直に広げて、カチューシャとか、ヘアピンとか付けるのも楽しそうね」

「うっ、ううっ……」

様々なヘアアレンジを施され、アクセサリーを付けられた自分の姿を鏡の中に想像して、真弓はいっそう赤くなる。

そして同時に、しまって——

「だめよ、真弓ちゃん。女子小学生がおちんちんをおつきくしたら。」

妹の忍び笑いに、真弓はますます恥じ入って、ショーツの中を痒かせる。

「じゃ、お姉ちゃんと一緒に下に降りて、ママに見せよっか」

「うん……」

真弓は小さく——しかしはっきりとうなずくと、「姉」とともに下に降りていった。

＊

リビングに降りると、母親はすでに書類を広げ、ボールペンを用意して待っていた。
「ふふっ、いいじゃない。ちょっと背が高いけど、これなら問題なく女子小学生として通えそうね。じゃあさっそく、こっちの書類に書き込んでちょうだい」
「うん……」

女子小学校に編入されるための書類を前にすると、先ほどまでは希薄だった実感が、じわじわと形になってくる。

（オレ、女子小学生になるんだ——）

ダイニングテーブルにつき、書類に記入する。

書類の形式としては「編入届」で、氏名、生年月日、住所といった基本的な情報のほかに、いま在籍している高等部のクラスや学籍番号と、編入先——つまり「学園附属女子小学校」を記入しなければならない。

「編入先は、附属、女子、小学校……」

すべての項目を記入し終え、真弓は大きくため息をつく。

小学校のセーラー服を着て、髪形も女の子のようにされた状態で、編入書類を書く。高等部に通えなくなる——つまりは高校の知り合いに会えなくなるのは残念だったが、それ以上に、女子小学生になることへの胸の高鳴りの方が大きかった。

「さて、真弓ちゃん」

母親は不意に改まった様子で、まっすぐに真弓を見つめる。

「今まではあいまいに済ませてきたけど、今年度から女子小学生になったんだから、これを機会にちゃんとしないとね」

「な、何のこと……？」

「呼び方よ。先週、男の子を『卒業』するって言ったのに、まだ自分のことを『オレ』って呼んでるし、ママと亜弓にも今まで通りじゃない。ここできちんとしないと、ね」

「あ……う、うん……」

「いよいよ、誤魔化せなくなったか——真弓は硬い表情で覚悟を決める。が、
「一人称は……そうね。小学1年生なんだし、『真弓は』って、自分の名前と呼ぶのが自然かしら？」

「まっ——さ、さすがにそれは、ちょっと恥ずかしいんだけど……！」

まさかの名前呼びに、真っ赤になって首を振ると、ツインテールが大きく揺れた。

母親は残念そうに、

「そう？　じゃあ、この前みたいに『あたし』呼びで、試しに——そうね、『あたしは、こ

の春から女子小学生になる、佐々木真弓です。あたしは、ママの娘で、亜弓お姉ちゃんの妹です』って、言ってみてごらんない」

「う……うん……」

期待のまなざしを向ける母親と妹——「お姉ちゃん」の前で、真弓はその言葉を口にする。
「あ、あたし、は、この春から、女子、しよ、小学生になる、佐々木、真弓です。あ、あたしは、マ、ママの、娘で、亜弓——お姉ちゃんの、い、妹、です……」

「ふふっ、よく言えました」

「うんうん、ちゃんと言えてえらいわよ、真弓ちゃん」

隣の亜弓が手を伸ばして、「妹」の頭を撫でる。

自分のことを「あたし」と呼び、母親を「ママ」と呼び、妹を「お姉ちゃん」と呼び——
「女子小学生です」と名乗ったことで、褒められ、よしよしされる。男子高校生として、兄として、あまりにも気恥ずかしかったが——それは決して悪い気分ではなかった。

しかし。

「じゃあ、女子小学生らしくなったところで、午後にでも書類を届けに小学校に行きましょ
うか。その後で、ご近所さんに改めてご挨拶をしましょう」

「も、もう……！？　っていうか、ご近所さんに挨拶って、そこまでなくても……！」

「だめよ、こういうのはちゃんとしないと。急にうちに女子小学生が増えたたら、ご近所さん
も戸惑うでしょうし」

「それはそうだろうけど——でも……」

膝の上でこぶしを握ろうとして、スカートの裾をつかんでしまう。そんな細かなところに
まで、女子小学生の制服を着ていることを思い知らされて、ショーツの中のものがますます
猛ってしまい、いまにもスカートを押し上げそうなほどだった。

（は、早く2階に行って、オナニーしたい……！）

亜弓はくすくす笑って、

「ほかにもやらくちゃいけないことはたくさんあるわね。あたしのおさがりのあれこれ
も、ちゃんと名前を書き替えたほうがいいんじゃない？」

「う、うん……じゃあ、2階に行って、学用品の名前、書き替えてくる」

渡りに船とばかり、真弓は妹の言葉に便乗して席を立つ。午後から学校に行って、ご近所
にも挨拶に行かなければならないとなると——その前に抜いておかないと、勃起してしま
ったら大変だ。

（改めて考えると、女装で本格的に外出することに……）

階段をのぼり、部屋に戻ってベッドに腰掛ける。いつものオナニースタイルだが、女兒制
服を着てとなると汚さないように注意しなければ——後ろの裾をお尻の後ろに流し、前側
を大きくめくりあげて、猛々しい勃起の輪郭が浮かび上がったショーツを、丸出しにした時

だった。

「あっ、やっぱり真弓ちゃん、オナニーしようとしてる。学用品の名前、書き替えるんじゃないの？」

「あ、亜弓——お姉ちゃん……これは、その……」

当然のように入ってきた亜弓に見られて、真弓は慌ててスカートを下ろそうとするが、
「あっ、そのままでいいわよ。真弓ちゃんにちょっとしたお願いがあっただけだから。
お姉ちゃんのお願い、可愛い妹の真弓ちゃんなら聞いてくれるよね？」

「お願い——って、な、なに……？」

亜弓の態度に嫌な予感を覚えながらも、真弓が恐る恐る訊き返すと、

「真弓ちゃん。あたしの前で、オナニーを実演してちょうだい」

「は——はあっ！？ お、オナニーを、亜弓——お姉ちゃんの、前で……！？」

「うん。いいでしょ？ 男子のオナニーっていうのがどういうものか、見てみたくなって。学校ではマスターベーションって習ったけど、やっぱり実際に見てみないとね」

「お、お前な……！」

「お前じゃなくて、亜弓お姉ちゃん、でしょ？ 真弓ちゃんはお姉ちゃんの言うことが聞けないのかなー？ エッチなことしようとしてたって、ママにいいつけるわよ？」

「ううっ……！」

そう言われては従わざるを得ない。

真弓は観念して、再びスカートをめくりあげる。

勃起のシルエットに大きくせり出し、シミすら浮かんだそのショーツを、亜弓はのぞき込むように「妹」の前に座り込んだ。

「じゃ、実況と解説もよろしく！」

「じ、実況と解説までしなくちゃダメなの……！？」

「もちろん。妹の——ううん、お姉ちゃんの性教育の一環だと思いなさい」

「むしろ教育に悪いと思うんだけどなあ……」

ぼやきつつも、真弓はショーツをずり下して、すでにいきり勃った男性器をあらわにする。

「うわっ、真弓ちゃんのチンコ、えっぐう……可愛い女子小学生みたいな外見してるのに、そこだけは男子って感じね」

「い、言わないでよお……！」

身長140センチと少女のような外見、本人の密かな趣味で伸ばした髪は二つ結びにされ、女子小学生の制服がこの上なく似合っている真弓。

しかしその股間から生えていたのは、まごうことなき16歳の少年の肉欲——彼自身の手首ほどもありそうなモノが、玉袋に引っかかっているショーツに支えられて、隆々と聳え立っていた。

赤黒い亀頭。反り返った雁首。裏筋には尿道がくっきりと浮かび、内臓色をした竿には無数の血管が赤青入り乱れる。玉袋さえもきゅっと引き締まって、あたかも欲望が解放される時を察して発射準備を整えているかのようだった。

「うっ、なんか匂う……」

「ご、ごめん。ちゃんと毎日、洗ってるんだけど……」

「ふーん。じゃあこれが、チンコの匂いってやつ？ 臭いような、胸がつかえるような、変な匂い。まあいいわ。とりあえず解説はじめてちょうだい。まず、どうすればそんなに大きくなるのか、ね」

「う……これは、その……」

改めて口頭説明するとなると恥ずかしく、

「その、お、おちんちんは、女性の裸とか、下着とか、そういうものを見たり、触ったりすると、エッチな気分になると、大きくなります——」

「ちょっと、一般論に逃げないで、ちゃんと真弓ちゃん自身の話をしてよ。亜弓ちゃんは、いったい何を見たり、触ったりすると、エッチな気分になって、おちんちんがおっきくなっちゃうのかな？」

「ううううっ……お、オレ——じゃなかった、あたし、は、女の子の服を、見たり、触ったり、着たりすると、昂奮して、勃起、しちゃいます……」

安易な逃げは許されず、真弓は自らの変態性癖を告白させられる。

とたんに亜弓の笑いがはじけて、

「あははっ、そっかそっかー、真弓ちゃんってば、女の子の服に昂奮して、チンコをおっきくしちゃうんだあ！ あたしのおさがりのセーラー服なんて、ぴったりね。ええと、そう言うのを『オカズ』っていうんだっけ？」

「う……は、はい。亜弓、お姉ちゃんの、おさがりの、下着や、セーラー服は、あ、あたしにとって、最高の、『オカズ』です……」

「くすくすっ、なるほどねー。じゃ、その大きくなったチンコを、どうするのかな？」

「そ、その、こうやって、握って——」

妹の前で、股間にそそり立つ肉棒を握る。手のひらに熱が伝わるのと同じ、まるでベルの音を聞いたパブロフの犬がヨダレを垂らすかのように、ペニスは歓喜に震えながら先走りを漏らした。

「あ、あっ……ゆ、ゆっくりと、しごき、ます……！」

彼自身も辛抱たまらず、握った手のひらをゆっくりと上下させる。くちゅっ、くちゅっと淫らな音が響くと、

「へえ……握って、こするんだ……」

それを見つめる亜弓の目も、熱っぽさを帯びていった。

「っていうかこれ、粘膜にもこすれてるけど、痛くないの？」

「う……ちょ、ちょっと痛いけど、ゆっくりと、なら……」

ローションを使えば痛みもなく、快感のみを味わうことができるのだが、さすがの真弓にもそんな知識はない。ただ自分の手のみ、潤滑剤すら先走りだ寄りという原始的なおナニーも、しかし亜弓にとってはじゅうぶん物珍しいようで、

「すごい……どんどん先っぽから、透明な——カウパー腺液、っていうんだっけ？ おちんちんに垂れて、白い泡になって——あんなに大きかったのが、もっと大きくなって——」

ククッ、と喉の奥で笑う。その目はぎらぎらと輝き、少女ながらの好奇心と嗜虐心とに燃え上がっていた。

「さあ、真弓ちゃん。あたしに見せて。おナニーのクライマックスを。そのおちんちんが、『シャセイ』するところを——」

「は、はい……！」

もはや彼自身にも、手が止まらない。

勢い良く手を動かせば、官能への高鳴りが充填されてゆく。先走りに濡れそぼった竿はさらに硬く、太く、赤く膨れ上がって、可愛らしいセーラー服に似合わぬ凶暴さを誇っていった。

「お、おちんちんをこすっていると、最後には、せ、精液が、出てきます。これが、射精で——しゃ、射精すると、すごく、気持ちよく、なれますっ……！」

うわごとのように解説を続けながらしごくうちに、ついに限界に達する。

「あ、ああっ……！」

内圧によってはちきれんばかりの竿と亀頭が痛みを発生し、こすりあげる手の運動が止まって、縋り付くようにぎゅっと握りしめる。しかしすでに少年の雄は、欲望を解放するに十分な刺激を受けていて——

「あっ、で、出るっ……！ 亜弓、離れて——！」

警告は、一瞬遅かった。

亜弓が飛びのこうとしたその時にはもう、彼のペニスは大きく脈打ちながら勢いよく精液を噴出しているところで——熱くドロドロとした、溶岩のごとく白濁液が、少女の顔に飛び散っていた。

「きゃあっ！？ な、なにこれ、クッサ……！」

「うう、ごめん……！」

顔についたモノを指ですくい、匂いを嗅いで顔をしかめる亜弓。

真弓は急いでティッシュを取り、何枚か妹に渡しつつ、自分も手に垂れた精液を拭き取りながら謝る。

「お姉ちゃんの顔に射精するなんて、まったくとんでもない妹がいたものね。これはきつー

いお仕置きが必要かな？」

「お、お仕置き……！？　いったい何を……」

「うん。そうねー、いまからしばらくスカートなしで、パンツ丸出しのまま過ごしてもらおうかしら。お姉ちゃんの顔が近くにあるのに、我慢できずに射精しちゃう真弓ちゃんには、びったりじゃない？」

「ううっ、は、はい……」

真弓は泣きそうになりながらも、言われたとおりにスカートを脱ぐ。セーラー上着の下からパンツ丸出しという惨めな格好になったところで、

「さ、学校に行く前に、持ち物に名前を書いちゃわないとね。ランドセルも、制服も、文房具やノートも——ちゃんと真弓ちゃんの名前にしましょうね」

「はい」

持ち物に名前を書く。ただそれだけの行為であっても、女子小学校生活の準備と考えると、昂奮と緊張を抑えきれない真弓であった。

＊

各種持ち物から妹のおさがり女兒下着、女兒ソックスまで、あれこれと名前を書き終わったころには、お昼近くになっていた。

(午後からは小学校に行って、そのあとご近所さんに挨拶——ううっ、緊張する……！)

考えるだけで、昼食の味もよくわからない。食べ終わったところで、

「ママ、そろそろいいんじゃない？」

「そうね。もう午後だし、頃合いかしら」

「頃合い……？　えっと、食べたばかりだけど、もう出かけるの？　まだ、心の準備が……」

「ふふっ、違うわよ。こういうのって、午前中だけっていうのがローカルルールでしょう？」

「？」

ふたりの言葉についてゆけず、首をかしげる真弓。

「くすくすっ、真弓ちゃんったら、こっちが拍子抜けするくらい簡単に信じちゃうなんて、ほんとに女子小学生になりたいのね」

「え、ど、どういう——」

「真弓。あれを見てごらんなさい」

母親に誘導されるまま、真弓はリビングの壁に目をやって——同時に「女装妄想ノート」に書いた自分の妄想を、今さらながらに思い出した。

母親の指さす先にあるのは、日めくり式のカレンダー。

その日付は、4月1日。

そして「女装妄想ノート」に書いた一文は――

「――エイプリルフールに騙されて、女装させられる」

(続く)